

活 動 名	団 体 名	湯来のまち再生プロジェクト協議会
湯来こども教室	地 域	広島県広島市
	代 表 者	会長 武田 真哉
	支援金額	13 万円
活動概要	湯来町の子どもたちが自分たちの住む町の自然や文化が豊かであることに気づき、自信を持って守り続ける担い手となることを目的とする。そのために、湯来町の自然と文化に携わる体験プログラムを夏～秋にかけて実施した。体験プログラムの講師には地元大学である広島工業大学の生き物を研究する学生と、昔ながらの遊びを伝えることができる地元の高齢者（中でも、集落をあげて結束の高い「上多田集落」の方々）を講師として迎えた。夏休みに開催したプログラムは、そのまま自由研究として提出できるように、調査→研究→発表を内容とした。秋は文化体験と遊びを重要視した。8 月～11 月は悪天候の日が多く、活動にやや支障をきたしたが、参加者から高い満足度が得られた。 ◆実施時期 湯来町多田地区「古民家 SATOYAMA」、上多田集落、上多田集落みどり会館、湯来町水内川、湯来町丸小山公園、五日市漁港 ◆参加人数 幼児 4 名、小学生 14 名、保護者 7 名、大学生 10 名、上多田集落 5 名、スタッフ 8 名 参加総人員:38 名	



湯来こども教室 夏



湯来こども教室 秋

◆実施に伴う効果

体験後、保護者に向けたアンケートによると、「湯来町には自然がたくさんあるけれど、共働きのため、普段から思いっきり外で遊んだり、学ばせてあげる機会を与えてあげられなかったので、今回子どもたちが楽しそうに学んでいる姿を見てとても感動した。」「普段関わることの少ない、大学生の方や、高齢者との深い交流が体験できたことがとてもよかった。今後も続けてほしい」という意見が得られた。保護者からの評価は高く、来年度の開催に対して期待が大いに高まったことが実感できた。

◆苦勞した点

【天候による活動日数の追加】

夏休み期間の活動は 3 日間を予定していたが、すべて雨で延期となった。子どもたちは、「海」「里山」「川」の3班にわかれて、調査作業を行っていたが、雨が止んで、晴天に恵まれたとしても、河川での活動は増水により生き物を捕獲できない状況で、子どもたちが十分に生き物を観察することができなかった。夏休み期間ということもあり、延期の日程を立てることは容易であったが、「里山班」と「川班」に関しては、観察する環境のコンディションは十分とは言えず、その中で観察→研究→発表までを導くことは大変苦勞した。大学生の工夫により、「生き物がいないということはなぜか」という点をじっくり話し合ってくれたことで、プログラムの深みを増すことができたのはよかった。

【高齢者を先生としたこと】

上多田集落の高齢者に「竹馬」と「竹ぼっくり」、「かまどでの炊飯」を指導してもらった。高齢者とは幾度と打ち合わせを重ね、「子どもたちにやらせる」ということを伝えてきたが、本番を迎えると、どうしても高齢者の講師が手を出してしまい、子どもたちが主体で作業をする機会が少なくなってしまった。そのため、極力スタッフが、子どもたちと高齢者の間を取り持つような形で交流を進め、ひとつひとつの作業についての説明をおこなった。そのことで、「いま何をしているのか」については、一様の理解が得られたといえる。

◆今後の課題・発展の方向性

野外活動を中心としたプログラム構成であったため、天候不良に対するフォローが難しかった。特に夏は警報が発令されるような悪天候が続いたため、こうした場合にはプログラムを実施することはできない。ただし、警報は発令されないが、悪天候な時は室内でできるプログラムを充実させ、備えておくことが重要だと感じた。

今回は小学生が学ぶ側で、指導者として大学生と高齢者がいた。普段接することの少ない「大人」との交流という意味では効果があったが、課題に対して主体的に取り組むという点においては、大人に頼りすぎてしまい自主性を十分に伸ばすことができなかった。次年度は「体験学習」をもっと意識した形で、子どもたちが主体的に学ぶ仕組みを構築し、自然観察や大人たちとの交流を実現させたい。

◆活動を終えての感想・意見等

「学校外で普段、みんなで集まって遊ぶ機会がないから、子どもたちが楽しそうだ」という保護者の感想があった。そこから少子化に悩む中山間地の問題点に気づくことができた。湯来町の一部地域では近所に小学生が住んでいないため、遊ぶときは一人、または兄弟で自宅の中でゲームをしていることが多いという。よって自然豊かな環境で生活しているから、自然と親しんだ遊びをしているというステレオタイプな発想を見直すきっかけとなった。この活動を進めることは、子どもたちが地域に親しみをを感じるいい機会になると確信できたことがよかった。

今回は夏休みの自由研究というタイトルで小学生と大学生の交流が実現した。小学生からみた大学生は一番年齢の近い大人ということもあって、私たち保護者と接するよりも自由に伸びやかな交流を楽しんでいるように見えた。遊ぶときは遊び、学ぶときは学ぶというメリハリのあるプログラムを進めるには、大学生の力は絶大であることがわかり、今後の活動にも機会があれば大学生との交流は組み込んでいきたいと感じた。